

事業名	花き振興促進事業費		
細事業名	研修・展示会開催事業費	財務コード	428602
担当部課室	農政 部 花き農水産 課 花き特産 担当 (内線)	5311	

事業の概要

実施期間	始期 H9 年度 ~ 終期 年度		
実施主体	県(直営)		
事業の目的	だれ(何)を対象に 花き生産農家	その対象をどのような状態にして 栽培技術の向上により、高品質、安定 生産が図られている	結果、何に結びつけるのか 花き生産額の増加
	<p>事業目的 企業の農業者から新規参入者まで、幅広い花き生産者に対して研修会や講習会等を開催し、栽培技術の向上や経営知識の習得などを図る。また、展示会場において新品種や新商材等を展示し、産地の育成強化を支援する。</p> <p>事業内容 経営知識の習得を図るための専門研修や栽培技術の向上に向けた講習会の開催 ・専門研修会 4回 参加者数 187人 ・栽培技術講習会 16回 参加者数 205人</p> <p>花きの新品種等の展示や県産花きのPRを図るため、イベントなどで展示会を実施し、花き産地の育成強化を支援 ・新品種比較展示会 3回 参加者数 105人</p> <p>合計 23回 497人</p>		
事業の内容 主にH27年度			
根拠法令等			

事業の目標、実施状況等(事業実績及び成果の達成状況)

事業の実施状況と 目標の実現度	26年度	27年度		28年度	29年度	事業目標の考え方
	実績値	目標値	実績値	見込値	目標値	
活動指標 研修会・展示会等 への参加者数	466	550	497	600	600	活動指標 目標設定の考え方 過去3年間の実績値の平均に1割加えた設定
	活動指標達成率 (実績値/目標値)		90.4 %			データの出典等 実績報告書
成果指標 花きの生産額 <百万円>	3,946	3,957	3,983	3,968	3,978	成果指標 目標設定の考え方 新・やまなし農業大綱での5ヶ年の数値目標とした
	成果指標達成率 (実績値/目標値)		100.7 %			データの出典等 県農業生産額実績
決算額又は予算額 (千円) うち一財額	3,502	2,800		4,065	4,000	成果指標によらない成果
所要時間(直接分)	518 時間	518 時間		518 時間	518 時間	
所要時間(間接分)	0 時間	0 時間		0 時間	0 時間	
所要時間計	518 時間	518 時間		518 時間	518 時間	
人件費コスト 単位:千円 (@2,044円×所要時間)	1,059	1,059		1,059	1,059	

これまでの事業の見直し・改善状況

H14年度からフラワーセンターの運営と併せて農業振興公社に事業を委託していたが、H18年度にフラワーセンターが指定管理者制度に移行されたことに伴い、本事業が総合農業技術センターの所管に戻った。H20年度に、効果的な事業実施を図るため、生産者向けの研修会及び展示会に重点化し、一般向け研修の廃止と展示内容の見直しを行った。H24年度からは県オリジナル品種の早期産地化を図るため、現地適応性の確認と併せ、品種の展示会を開催するなど生産者のニーズにあった内容の見直しや改善を実施している。

活動量と成果の判断(平成27年度の業績評価)

(1) 事業は予定された活動量を上げているか (「活動指標の達成率」等から事業の活動量を判断)		
数値判定	活動量に係る一次評価	活動量に係る一次評価の考え方 数値判定と一次評価が異なる場合等に記載すること
H27年度活動指標の達成率		
b	b	

a: 予定を超えた活動量がある(120%以上) b: 予定どおりの活動量がある(80%以上120%未満) c: 予定したほど活動量がない(40%以上80%未満)
d: 予定した活動量に著しく足りない(40%未満)

(2) 事業は意図した成果を上げているか (「成果指標の達成率」、「成果指標によらない成果」から事業の成果を判断)		
数値判定	成果に係る一次評価	成果に係る一次評価の考え方 必ず記載すること
H27年度成果指標の達成率		花き生産者に対して栽培技術や経営知識の向上のための研修会や新品種展示会を実施し、平成27年度の生産額実績は、目標値に比べ、100.7%と増加していることから、意図した成果はほぼ上げている。
b	b	

a: 意図した成果を十分に上げている(120%以上) b: 意図した成果はほぼ上げている(80%以上120%未満) c: 意図した成果は十分ではないが、対象や方法の改善により成果の向上が見込める(40%以上80%未満) d: 意図した成果が十分でなく、成果を上げる方法も見あたらない(40%未満)

見直しの必要性(平成29年度に向けた改善等の考え方)

一次評価(担当部局評価結果)		
見直しの必要性	説 明	以外の判断項目
無	生産者の経営安定を図り、力強い産地づくりを推進するためには、生産コストの削減をはじめ、安定生産技術等の普及を効果的、効率的に行う必要がある。また、新品種の導入は、経営リスクが大きいいため、生産者に取り組みやすい環境を整える必要がある。そのため、消費者ニーズの変化に的確に対応できるよう、今後も研修会や講習会、新品種の展示会など引き続き実施していく必要がある。さらに、クリスマスエリカやピラミッドアジサイなど県が開発した技術や品種を早期に普及させるためにもノウハウの蓄積がある県が実施することが最も効果的である。	

・「以外の判断項目」の欄
a: 目的の達成 b: 新たな課題への対応 c: 対象の変化 d: ニーズの変化 e: 法律・制度の改正 f: 民間等実施 g: 市町村等へ移管 h: 外部委託
i: 経費節減 j: 類似事業と統合・連携 k: 所要時間の縮減 l: 7Qの改善 m: その他

二次評価(担当部局再評価結果) 行政評価アドバイザー会議(外部評価)での指摘事項を踏まえた担当部局による再評価		
見直しの必要性	説 明	以外の判断項目

・「以外の判断項目」の欄は、上記と同様とする

見直しの方向(平成29年度当初予算等での対応状況)

見直しの方向	具体的な実施計画等 「見直しの必要性」と「見直しの方向」が異なる場合は、その理由も記載すること
予算要求時に記入 予算編成後に修正等	

・見直しの方向は、「廃止」「一部廃止(施設については「譲渡」)」「終期設定」「休止」「他事業と統合」「縮小」「拡大」「実施方法等の変更」「改善済み」の中から選択し、見直しの必要性を踏まえ、具体的な実施計画等を分かりやすく記載すること
・見直しがない場合は「現行どおり」と記載し、必要に応じてその理由を記載すること

自主点検シート(事業の内容及び所要時間)に関する附属資料

様式2

所属名:花き農水産課

細事業名:研修・展示会開催事業費

調書番号:12

事業の内容を細分化した業務名	具体的な業務プロセス(手順)	業務の時期(フロー)	H27 所要時間 (h)	H28 所要時間 (h) A	H29 所要時間 (h) B	縮減等 B - A	具体的業務の見直しの内容	見直しに至った理由等 (又は見直しなしの理由等)
1 研修会・講習会等の開催	企画・立案	4月～2月	120	120	120	0	なし	業務上必要なプロセスであり、最短の所要時間で処理しているため
	講師等との打合せ	4月～2月	40	40	40	0	なし	
	資料作成	4月～2月	120	120	120	0	なし	
	会場等の設営・片付け	通年	40	40	40	0	なし	
	運営	通年	60	60	60	0	なし	
	支出事務	通年	50	50	50	0	なし	
						0		
(小計)			430	430	430	0		
2 新品種展示会の開催	企画・立案	4月～6月	24	24	24	0	なし	業務上必要なプロセスであり、最短の所要時間で処理しているため
	関係者との打合せ	4月～8月	10	10	10	0	なし	
	資料作成	8月～11月	24	24	24	0	なし	
	会場等の設営・片付け	9月～12月	8	8	8	0	なし	
	運営	9月～12月	12	12	12	0	なし	
	支出事務	9月～12月	10	10	10	0	なし	
(小計)			88	88	88	0		
所要時間 (計)			518	518	518	0		

(留意事項)

- 1 事業を細分化した業務名は、事務事業を構成する業務ごとに細分化し、その業務名を記載すること。
- 2 具体的な業務プロセス(手順)は、できる限り多くのプロセスを記載すること。
- 3 業務の時期は、業務のフローがわかるように具体的な業務プロセスごとに記載すること。(毎月、四半期ごとの業務等は、その1サイクルの期間を記載すること。)
- 4 各年度の所要時間(計)は、事務事業自主点検シートの「事業の目標、実施状況等」の「所要時間計」と一致すること。
- 5 具体的業務の見直しの内容は、わかりやすく簡潔に記載すること。(県民から見て分かりやすい表現とすること。)なお、見直しがない場合は、「なし」と記載すること。
- 6 見直しに至った理由または見直しなしの理由は、詳細に記載すること。(具体的な業務プロセスごと、または細分化した業務ごとに記載すること。)
- 7 適宜、業務内容に合わせ、行を加除して記載すること。(複数ページ可)

花き振興促進事業について

1 経緯

- ・本県の花きは、日本一の日照時間や夏期冷涼な高冷地を有するなどの恵まれた気候条件や、大消費地に近い立地条件を活かし、生産者の高い栽培技術により施設栽培を中心に洋ラン、シクラメンなどの鉢花やバラの切り花などが生産されている。
- ・花き産業を取り巻く環境は花き需要の低下や生産コストの増大、輸入切り花の増加、担い手の高齢化による農家数の減少など、年々厳しさを増しているが、花き生産は、本県の気候や立地の有利性を生かせる品目であり、小さな面積でも高収益な農業が実現でき、本県農業の活性化を図る上でも重要な分野である。
- ・本県花きの流通は、青果物と違い農協をとおさず、各農家が個々に市場出荷しているため、農協との関わりも少なく、また、農協も花きの営農指導員を配置しておらず、花きの生産振興は、従来から普及指導員を中心に県が主体となって行っている。
- ・本事業についても、平成9年4月、県内花き生産の振興拠点として、県が花き振興促進センターを整備したのに併せて事業化した。

2 事業目的・内容

企業の農業を目指す花き栽培農家から新規参入者まで幅広い農業者を対象に、研修会や講習会を開催し、経営知識の習得や栽培技術の向上を図る。また、展示ほ場において新品種や新商材等を展示し、早期産地化や経営安定を支援する。

(1) 専門研修・栽培技術講習会の開催

- ・花き生産に係る流通販売や経営改善、農薬の適正使用などについて外部の専門家を招き、研修会を実施する。平成27年度は4回開催し、参加者数は187人。
- ・県の特産花きやオリジナル品種であるニオイザクラやミニコチョウラン、クリスマスエリカなど、試験研究で成果のあった栽培技術を中心に講習会を実施する。平成27年度は16回開催し、参加者数は205人。

(2) 新品種比較展示会の開催

- ・ピラミッドアジサイや夏ギク、パンジー・ピオラなどの新品種展示を行い、生産者の品種選定の参考にする。平成27年度は3回開催し、参加者数は105人。

3 花き生産の現状と課題、今後の取り組み

(1) 現状

H27年度の花きの作付面積は129ha、生産額は39億8千万円となっており、施設栽培を中心に洋ランやシクラメンなどの鉢もの、バラなどの切り花が生産されている。

主な品目の生産額は、コチョウラン 8 億 5 千万円、シンビジウム 4 億 6 千万円、花壇苗 6 億 3 千万円、シクラメン 3 億円、バラ 2 億 3 千万円となっている。

なお、洋ラン類は特に本県の生産条件、立地条件の優位性を活かした生産が行われており、出荷額は全国第 6 位となっている。

(2) 課題

生産面

生産コストの高騰（人件費、資材費、燃料費、流通経費）

高齢化による経営規模・生産量の減少

技術面

高品質化、成品化率の向上

異常気象に伴う生理障害、病害虫の発生

販売・流通面

消費の減少 市場単価の低迷 生産意欲の低下

花きに対するニーズ（必要性）の変化

共同出荷・販売による流通コストの低減

(3) 今後の取り組み

生産面

省エネ施設・設備の導入と技術開発

露地栽培や果樹、野菜との複合経営

退職帰農者や女性など新たな担い手の確保育成

技術面

オリジナル品種の開発・普及、他産地との競合

需要に応じた新商品の開発

低コスト栽培技術の導入

販売・流通面

小売店に生産現場情報を提供 消費者への情報伝達

商談会の増加により新規販路の拡大需要増大

直売所を活用した地場流通の拡大（切り花、花壇苗）

その他

花育等を通じた消費者ニーズの回復と需要の拡大

観光と連携した地産地消の推進

県産花きの P R 強化と観光利用

4 県の役割・県が本事業を実施する必要性

(1) 専門研修会・栽培技術講習会の開催

・本県の花き生産者は県内に点在していることから、専門研修会の開催を県域で実施することは効率的である。

- ・ 本県の花きの流通は生産者による個別出荷であり、農協組織との関わりが少ないため、営農指導体制が整っていない。そのため、県の普及指導員が中心となって指導する必要がある。
- ・ 県では試験研究から技術指導に至る一貫した支援体制が整っている。

(2) 新品種比較展示・新技術の実証等

- ・ 新品種、売れ筋商品の導入は、生産者の経営利益・所得向上に直結し、経営方向を決定する上で重要な課題である。
- ・ 花きの生産拡大には、新品種の導入が必要不可欠である。しかしながら、毎年多くの種苗会社から出る新品種を、各生産者が比較し検討することは、多大な労力と資材費を要するものであり、経営的リスクが大きい。生産者のリスク軽減を図る上でも、県が新品種の栽培特性や地域適応性等を把握した上で比較展示を行い、有利な経営展開が図られるよう支援する必要がある。
- ・ 県の試験研究機関で育成したオリジナル品種は、県奨励品種に位置付け早期の普及を図り、産地化、ブランド化を図るためにも、県が担うことが最も効果的である。
(オリジナル品種の早期導入は農家の要望も強い)

5 やまなし花き振興計画の位置付け

本事業は、平成27年度に策定した「やまなし花き振興計画」の施策の一つとして、位置づけられている。試験研究と普及指導の連携強化、生産技術の向上による高品質化、早期産地化、経営の安定化等の支援を行い、儲かる農業への転換を今後さらに推し進めていく。

花き振興促進事業（研修・展示会開催事業費）について

専門研修会及び栽培技術講習会



新品種比較展示会



花き生産の現状

1 花き生産の現状

(1) 栽培面積

本県の花き栽培面積は、高齢化や担い手不足、需要の低迷等により減少しています。

特に平成26年2月の大雪により、ハウス等施設の倒壊や破損の影響を受け、バラやスターチスなどの切り花、シンビジウムやシクラメンなどの鉢花の作付面積が減少しました。

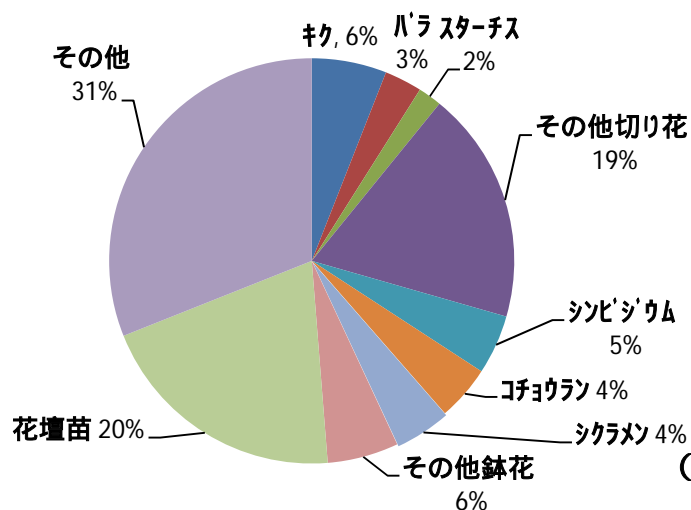
花壇苗栽培についても、ガーデニングブーム等に合わせて栽培面積が拡大してきましたが、ここ数年は減少傾向で推移しています。

作付面積の推移

単位: ha

品目別\項目別\年度		H17	H20	H23	H26
切花類	キク	10.9	10.9	10.1	7.8
	バラ	8.1	7.1	6.9	4.0
	スターチス	6.2	6.3	5.7	2.5
	その他切花類	26.7	26.0	26.0	24.4
鉢花類	シンビジウム	9.8	9.8	9.0	6.2
	コショウラン	6.0	6.2	5.8	5.8
	シクラメン	8.7	8.7	8.7	5.9
	その他鉢花類	9.9	10.0	10.0	7.5
花壇苗		31.5	31.5	32.8	26.6
その他		41.2	41.2	40.8	40.8
合計		159.0	157.5	155.6	131.5

品目別作付面積の割合(H26)



(資料: 山梨県農政部)

(2) 生産額

本県の花き生産額は、平成26年2月の大雪の影響による作付面積の激減に伴い、大きく下落しました。

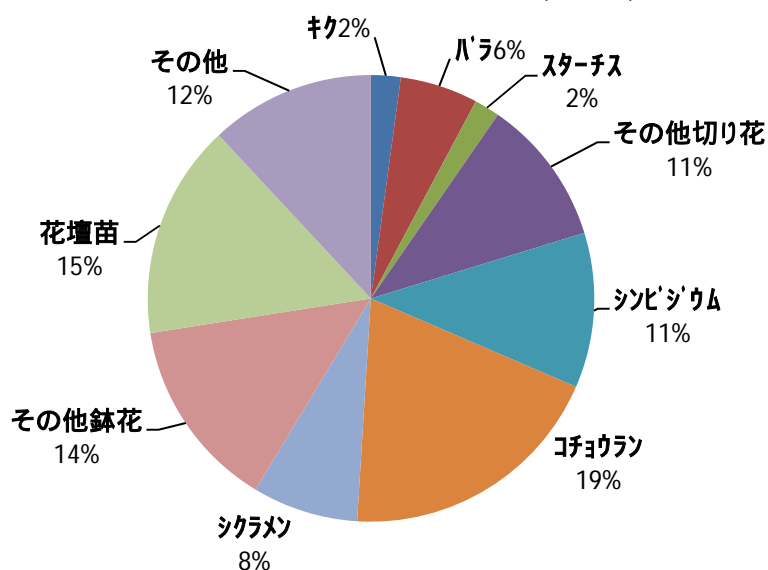
特に切り花は、輸入花きの流通量が増加する中で、他作目への転換により生産額は減少しています。

生産額の推移

単位：億円

品目別\項目別\年度		H17	H20	H23	H26
切花類	キク	1.5	1.6	1.8	0.8
	バラ	4.3	4.1	3.9	2.2
	スターチス	2.3	2.2	2.1	0.7
	その他切花類	5.2	5.0	5.0	4.2
鉢花類	シンビジウム	8.0	7.7	7.0	4.4
	コチョウラン	10.0	10.0	7.8	7.7
	シクラメン	5.2	4.9	4.7	3.0
	その他鉢花類	8.1	7.9	8.4	5.5
花壇苗		5.4	5.9	6.7	6.1
その他		5.5	5.4	5.4	4.7
合計		55.5	54.6	52.8	39.5

品目別生産額の割合(H26)



(資料：山梨県農政部)

2 農家・農業者の現状

(1) 農家戸数

販売目的で花きを栽培した農家戸数は、全国、山梨県とも平成17年ごろにかけて増加しましたが、近年は減少傾向にあります。

本県においては、平成17年から平成22年までの5年間で70戸減少しており、高齢化や他品目への転換などが原因と考えられます。

花き農家戸数の推移

単位：戸

	H7	H12	H17	H22	H22 / H17
全国	74,309	65,843	81,129	66,889	82.4%
山梨県	327	309	459	389	84.7%

資料：農林水産省統計部「農林業センサス」

販売目的の作物の類別作付(栽培)農家数「花き類・花木」

(2) 新規就農者

花き生産の新規自営就農者は年間数名であり、就農形態は、農業法人等への新規雇用就農者やUターン就農となっています。

新規就農者数

単位：人

	H21	H22	H23	H24	H25	H26
総数	100	185	207	224	248	274
うち花き	0	0	3	1	8	1
花きの新規就農者割合	0%	0%	1.5%	0.4%	3.2%	0.4%

資料：山梨県農政部

